

大谷の花火打ち上げ

お話 / 白田 寿春 さん

■祖父と父のこと

うちは玉屋とか花火屋とか呼ばれている。じいさんの藤三郎が花火を作って打ち上げていたんだ。そして、親父の八郎がその後を継いだ。だけど、花火製造は、規制がだんだん厳しくなったのと、危険を伴う仕事だったのでしなかったんだ。

じいさんの花火を作る木型とかあったけね。火薬を入れる丸い紙のお椀を作るもので、木の球になっている。そこに何枚も何枚も紙を重ね貼りして、最後に包丁を入れて二つに割るんだな。刃物の跡がついていたけね。三寸玉とか五寸玉とかのお椀を、昔は、そうして全部手作業で作っていたんだな。

子供の頃、白山神社のお祭りや学校の運動会の日に、昼間の花火を上げるんだけど、ちょうど学校の裏のほうの田圃で親父が打ち上げるから自慢だったね。その頃はパラシュート入れてあったから、それを拾いたくてみんなで田圃の中をこいで行ったりもした。じいさんもそういうのを作っていたようだ。殻玉も魔除けになるからみんな拾うもんだったね。

親父にはよく追っかけて行って打ち上げる所を見ていた。大船木の橋が完成した時や上郷のダム祭りの花火打ち上げにも行った。親父が打ち上げる姿はカッコ良かったね。

■松田花火屋（中山町長崎）とのつながり

その頃は、長崎の松田花火屋が作った花火を買って打ち上げていた。松田さんの話では、花火の作り方を、私の曾じいさん（藤三郎の父）から、松田さんの曾じいさんが教わったのが、親しくしている始まりだと聞いている。

親父に「お前もしてみる」みたいなことをよく言われていたから、自然とできるようになったんだ。手伝い経験 3 年以上で講習を受けると「煙火打ち上げ従事者」という資格をもらえるので 23 歳の時にとった。松田花火屋所属を表す自分の番号がもらえる。

■風神祭の花火打ち上げ

風神祭の花火打ち上げは、あの頃は連合区とは関係なかったから、親父も一人でバイクに乗って寄付集めしているんだっけ。寒河江や山形までも行くっけね。昭和 46 年頃に、うちでだけするのは大変だということで、連合区さお願いするようになったんだ。

俺は静岡で働いていたので、毎年風神祭の時には帰って来て打ち上げを手伝うんだっけ。親父は俺が 33 歳の時、62 歳で亡くなった。その年は、お袋に

も段取ってもらって、松田花火と一緒にあげたんだ。

打ち上げするのに最低 5 人いるから、今でも風祭りの時に松田花火に来てもらっている。筒を立てるための杭立ての準備は、朝からしないと間に合わなくなる。

打ち上げは、線香花火みたいに散る小さな火種があって、それに火を点けて筒の中に上から入れる。すると筒底に敷いておいた黒煙火薬が爆発して玉は上がっていく。

万一、筒に火薬入れるのを忘れると、上がらないで筒割れして吹っ飛んでくるから危ないんだ。「騒がずゆっくりでいいから火薬はきちんと入れるべ」と呼びかけながら作業している。

火種を筒に入れると、一瞬のうちに花火は飛び出すけど、火花も筒から飛び出すから、その火花を被らないように風向きを考えて入れるようにする。背中に入ったりしたら大変だからね。火種を持つ指先なんかは、いつもピリピリ火傷している。好きでないとできない仕事だね。

打ち上げは、行列している人達も見て楽しめるように、見えやすい保育園跡の所を通過している時とか休憩している時とかに集中して上げるようにしている。

■やりがい

嬉しいのは玉が上がって行って無事開いた時だね。一発、一発嬉しくなる。そして、すべて無事に終わった時は、やっぱり安堵感はあるね。部落の年寄りからは「大変だったな」と声かけてもらえるね。

大谷の花火の歴史は古いし、大切な役割だと思っている。うちも代々花火屋しているから無くさないで続けていけたらと思っている。なにより、大谷の皆さんの協力でできているので、これからも喜ばれる花火を上げていきたいね。

(取材 / 平成 26 年 3 月)



白田 寿春（しらた としはる）氏

昭和 31（1956）年 1 月 11 日生まれ。昭和 55 年に煙火打上従事者資格取得。平成 2 年より父八郎氏に代わり大谷風神祭の花火打ち上げ従事者となる。